厚木市史たより　第34号
令和8年（2026）10月1日
題字は渡辺崋山筆「游相日記」から文字を抽出して作成したため、清音の「たより」としました。

厚木市にあった「敵国民間人」抑留所（前編）

POW（捕虜問題）研究会
小宮 まゆみ

1　アジア太平洋戦争下日本に置かれた敵国人抑留所

一九四一年（昭和十六）十二月に勃発したアジア太平洋戦争によって、アメリカ合衆国では一二万人に及ぶ日系人が、カリフォルニア州などから内陸の強制収容所に収容されて、苦難の生活を送りました。一方日本でも同様に、国内に居住していた米・英・オランダ・カナダなどの外国人を「敵国人」として拘束し、国内各地に設けられた「敵国人抑留所」に収容しました。この厚木市にも敵国人抑留所が設けられたのですが、それはあまり知られていないことだと思います。

一九三七年（昭和十二）に本格化した日中戦争は、やがて長期化し膠着状態に陥りました。国際的な非難を浴びて孤立した日本は、一九四〇年（昭和十五）ドイツ、イタリアとの間に日独伊三国同盟を結びました。すでにヨーロッパでは第二次世界大戦が始まっており、ドイツとの同盟は英米など連合国との敵対を意味しました。一九四一年八月米国は対日石油輸出禁止に踏み切りました。日米戦争は避けられないとみた内務省警保局は、同年十一月二十八日、「外事関係非常措置に関する件」という通牒を発し、開戦時には敵国籍の「十八歳以上四十五歳までの男子」を抑留するよう各県警察に通達しました。目的は、「スパイ活動の防止と外国人の身柄の保護」とされました。その時点で日本にいた連合国籍の外国人は、女性や子どもを含め約二千人でした。

十二月八日の朝、日本軍の真珠湾攻撃が報道されるや、警視庁と各道府県警察の特高外事課により、全国一斉に、米・英など連合国籍の外国人の拘束が始まりました。普通の市民として暮らしていた外国人三四二人（英一〇〇、米九三、カナダ七三、オランダ二三、ベルギー一六、ギリシャ一四、その他二三）が抑留されました。最も多くの外国人を抑留したのはこの神奈川県で、九三人でした。これら抑留された外国人のうち、二〇〇人余りは、その後に派遣された第一次日米交換船（一九四二年〈昭和十七〉六月）、日英交換船（同年七月）、第二次日米交換船（一九四三年九月）に乗って、戦時下の海を越えて帰国しました。しかしその一方日本は、東南アジアや太平洋の島々を占領するとともに、総数約四三〇人もの外国人を日本に連行し、新たに抑留に加えました。また国内の外国人に対しても、一九四二年九月には「教師・宣教師・修道女・保母は女性や高齢者でも抑留する」、一九四三年九月には同盟国から敵国に転じた「イタリア人を抑留対象に加える」など、抑留対象の拡大が行われました。その結果抑留者数は、開戦時より減るどころか次第に増え、終戦までに延べ約二千人にのぼりました。〈注1〉

2　厚木市七沢に女性や高齢者の抑留所設置

アジア太平洋戦争の戦況は、開戦後わずか半年の一九四二年六月、ミッドウェイ海戦で主力空母四隻を失う敗北を喫して、太平洋地域での制空権を失い劣勢に転じました。やがて船舶による兵站（へいたん）の維持が困難になって、前線での敗北が始まり、内地では物資不足が表面化してきます。それをおおい隠すかのように、政府は国民に対しスパイ防止の徹底を要求しました。一九四二年九月から始まった、女性教師や宣教師、修道女の抑留は、戦況の悪化から国民の目をそらし、外国人迫害へ向けるものでもありました。

特に神奈川県では、横浜市中区山手の旧外国人居留地を中心に、開戦時に一家の柱である成人男性を抑留され、収入の道を閉ざされた家族が心細く暮らしていました。一九四三年九月、内務省は「外国人の旅行等に関する臨時措置令の一部改正」を公布施行し、すべての外国人の「指定地域」からの退去を要求



図1　1945年（昭和20）頃の玉川館（玉川館提供）

図２　七沢抑留所の抑留者名簿

	国籍	名　　前	性	年	居住地	備　　考
1	英	リナー・ソルター	女	23	横浜市中区	兄ジョージは交換船で帰国
2	英	タマ・ウォーカー	女	60	横浜市中区	抑留のヒュー・ウォーカー母
3	英	タズコ・ウォーカー	女	29	横浜市中区	ヒュー・ウォーカー妻
4	英	ローダ・ウォーカー	女	5	横浜市中区	ヒューの娘
5	英	ロモーラ・ウォーカー	女	5	横浜市中区	４と双子の姉妹
6	英	ジェームズ・ウォーカー	男	6	横浜市中区	ヒューの息子
7	英	イザベラ・スプリンゲット	女	44	横浜市中区	七沢でキリドイルの友達
8	英	ジェーシカ・ウォーカー	女	57	横浜市中区	ヒュー・ウォーカーの従姉
9	英	チャールズ・バーナード	男	93	横浜市中区	明治初めに来日した茶貿易商
10	英	チヨ・バーナード	女	53	横浜市中区	９の妻
11	英	アリス・ウッドラフ	女	56	横浜市中区	兄ジョージは神奈川第１に抑留
12	英	ルーシー・ウッドラフ	女	45	横浜市中区	11の妹
13	英	ジョージ・ラッセル	男	64	横浜市中区	カルノ商会経営者の息子
14	英	ミヨ・ラッセル	女	54	横浜市中区	13の妻
15	英	トーマス・D・ライト	男	73	横浜市中区	秋田県に移転後9月に死亡
16	英	アンニーズ・ヤーメン	女	62	不　明	横浜市中区に勤務 父オランダ人
17	英	ウィリアム・F・ボールデン	男	78	茅ヶ崎町	茅ヶ崎町在住、七沢で抑留中死亡
18	英	イザベラ・ボールデン	女	60	茅ヶ崎町	17の妻
19	英	エミイ・ペーンズ・ニューマン	女	57	不　明	1945年２月９日七沢抑留所で死亡
20	英	イザベラ・ミルン・モリソン	女	87	鎌倉市	1945年２月15日七沢で死亡
21	米	アリス・キリドイル	女	44	横浜市中区	東洋バプコック秘書
22	米	ローレンス・ニートマン	男	71	横浜市中区	
23	米	エレノア・ラフィン	女	47	横浜市中区	1944年６月26日抑留中に自殺
24	米	ジェニファー・マイヤース	女	25	横浜市中区	兄は領事館勤務で交換船帰国
25	米	アンナ・マイヤース	女	23	横浜市中区	24の妹
26	蘭	エリザベス・ドンカーカーチス	女	67	横浜市中区	弟ヘルマンは神奈川第1に抑留
27	蘭	トメマリ・ドンカーカーチス	女	63	横浜市中区	26の妹
28	蘭	ヨハンナ・カースト	女	71	横浜市中区	
29	ギリ	エカテリナ・ヒトポウラス	女	28	横浜市中区	夫は神奈川第1に抑留
30	ギリ	グレゴリー・ヒトポウラス	男	3	横浜市中区	29の息子
31	新	トーマス・ジョセフ・ビビー	男	80	横浜市中区	1945年２月26日七沢で死亡
32	ノル	フレドリック・オールセン	男	77	不　明	船長

＊蘭はオランダ、ギリはギリシャ、新はニュージーランド、ノルはノルウェーを示す
＊＊年齢は終戦時または死亡時のもの

しました。指定地域は旧外国人居留地を含む横浜市の高地・臨海地域、横須賀軍港、横浜全港域その他の広範囲におよび、そこに居住中の外国人は、ドイツなど同盟国人、スイスなど中立国人、そして米英など敵国人と、合計で五〇八世帯一二七人にもおよびました。転居の費用は日本側が負担するとされ、この法令に従って多くの外国人は、軽井沢や箱根などに場所を選んで転居していきました。しかし敵国人については、監視のために集団居住をさせる、と定められました。その移転先として指定されたのが七沢へ移転させられました。現在も営業中の玉川館の記録「営業統計簿」にも、先代のご主人山本鈞二氏の手による「十二月七日　敵国婦女子ノ収容所トナル」という記載があります。この時七沢に新たな敵国人抑留所が開かれたのです。

３　七沢に抑留された人々

『外事月報』一九四三年十二月分の記事には、移転した外国人について、世帯数だけでその名前については記載がありませんが、『外事月報』一九四四年八月分に掲載された外国人移転先一覧表により、一二世帯一二人の名前が明らかになります。またこの抑留所が秋田県に移転した後の、終戦時の名簿が、GHQによって作成された「Investigation Division Reports No.４１５（調査課報告４１５番）」〈注３〉に掲載されており、一八世帯二八人の名前が明らかになります。ただしこれは終戦時に生存していた人の名簿なので、それに死亡者を加えると、図２に示す三二人が抑留されていたと思われます。名前がグレーに塗られている人は、戦争中および終戦直後に抑留所で亡くなった人です。紙面の都合で、名前はカタカナ書きで記します。

抑留された三二人中、女性が二三人と約七〇％を占めており、まさに「敵国婦女子ノ収容所」です。男性は九人ですが、そのうち七人は六十四歳以上の高齢者で、最高齢は９番のチャールズ・バーナード九十三歳。明治初期に来日した横浜では有名な英国人の茶貿易商です。高齢者を除くと、残る二人は６番のジェームズ・ウォーカー六歳と、30番のグレゴリー・ヒトポウラス三歳で、いずれも家族に伴われての抑留でした。

女性たちには、開戦時にスパイ容疑で検挙され、あるいは敵国人として神奈川第一抑留所に収容された男性の、妻や娘、姉妹が多いことに気がつきます。神奈川第一抑留所とは、開戦時に横浜市中区の横浜競馬場に設置され、県内の在日外国人男性約五〇人を収容した抑留所です。一九四三年（昭和十八）六月に北足柄村（現南足柄市）内山の、カトリック修道会施設に移転して、終戦まで継続しました。名簿の２～６番と８番のウォーカー姓の六人は、神奈川第一抑留所に収容された、ヒュー・ウォーカーの母と妻子と従姉です（図３）。ヒューの父親は明治期に来日して横浜商業学校などの英語教師を勤め、ヒュー自身は映画俳優でした。11、12番のウッドラ

フ姉妹は、神奈川第一に収容されたジョージ・ウッドラフの妹たちです。ウッドラフ家は居留地の食肉商で知られ、ジョージは商社勤務でした。21番アリス・キリドイルは、明治期に横浜居留地に鉄工所を設立したエドワード・キリドイルの娘です。父の事業を引き継いだ兄デニスは、開戦時に検挙され、その後第一次日米交換船で帰国しました。23番エレノア・ラフィンは、居留地の両替商などで成功したアメリカ人実業家T・M・ラフィンの娘で、兄トーマスは開戦時にスパイ容疑で検挙され、弟ウィリアムは神奈川第一抑留所に収容され、二人とも第一次日米交換船で帰国しました。26、27番のオランダ人ドンカーカーチス姉妹は、神奈川第一に抑留された乳製品加工業ヘルマンの姉でした。29、30番のギリシャ人ヒトポウラス母子は、開戦時に横浜港で拿捕された船の船員だった夫が抑留されたため、その帰りを待っていました。

住所が分かる範囲では、ほとんどが横浜市中区の山手など旧外国人居留地やその近辺に住んでいた人々でした。高齢の夫と共に夫婦で収容された、10番チヨ・バーナード、14番ミヨ・ラッセル、18番イザベラ・ボールデン以外の女性たちは、夫や兄弟を抑留され、収入を失って困窮していた可能性があります。家からの立ち退きを命令され、七沢に行けば温泉宿でゆっくり暮らせる、食事は三食出るという警察官の言葉に誘われて、横浜山手の家を離れ、七沢に移ってきた人もいたと思われます。

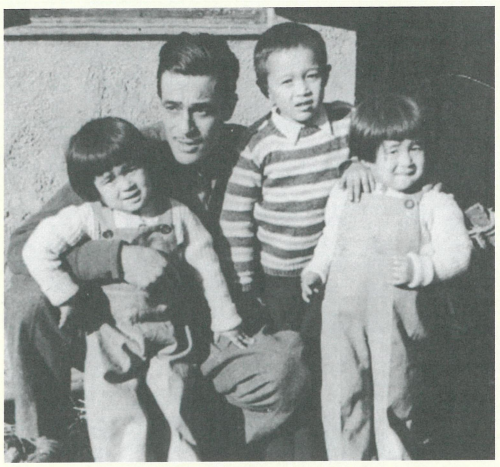


図3　ヒュー・ウォーカーと子どもたち
（ウォーカー家提供　戦後間もない頃）

4　七沢抑留所の暮らし

それでは、この七沢の抑留所での暮らしはどんなものだったのでしょうか。筆者が抑留所に関する聞き取りのため、初めて七沢の福元館を訪問したのは二〇〇三年（平成十五）三月二十八日でした。当時は先代の女将古根村喜代子さんがお元気でしたが、戦後の一九四八年（昭和二十三）に嫁いできたのでと、戦争中実際に外国人の世話をした義妹の鮑子和歌子さんに電話で確認しながら、当時の様子を話してくれました。二〇〇五年十一月十五日にもお二人に会って、再度お話を聞きました。

「本館二階の八畳間にオランダ人の姉妹、六畳間にウォーカーさん、本館奥の八畳間を二つ使ってバーナード夫妻、洋館二階の六畳二間にトーマス・BB夫妻、離れの『山月』にラッセル夫妻が暮らした。ラッセルさんは近所の人が女中さんとしてお世話していた。バーナードさんはかなりの歳で、ほとんどベッドに寝ている状態だった。トーマス・BB夫妻もかなりの歳で、こちらで亡くなったと思う。子どもがいた記憶はない。部屋はすべて日本間で、畳の上にベッドを置いていたが、そのベッドはよそから運んだものだった。外国人は捕虜として預かったもので、村の駐在が時々見に来た。でも外国人の行動は割合自由で、近くを散歩したり、商店に買い物に出かけることもあった。食事の支度は廊下にコンロを置いて、外国人が自分たちで煮炊きをしていた。宿の料金は毎月玉川館の主人と福元館の主人が一緒に、横浜の県庁まで取りに行った。」というようなお話でした。古根村さんの口から次々と出てくる外国人の名前から、当時の様子がおぼろげに浮かんできました。

二〇〇四年十月三日には玉川館を訪問して、主人の山本淳一さんからお話を聞きました。山本さんは戦争中の一九四三年の生まれですが、宿に外国人がいたことは、うっすら記憶にあるということでした。

「外国人で覚えているのは、アメリカ人女性のキリドールさんと、子ども、他に一組外国人がいた。子どもはキリドールさんの子どもでは無かったかもしれない。近所の佐藤忠治さんが、外国人を気の毒に思って、裏山の道を通って目立たないように何度も野菜を持ってきてくれたということで、キリドールさんは佐藤忠治さんの親切に感謝していた。戦後このことが新聞に載った。」ということでした。抑留者のうち子どもは、名簿4～6番のウォーカー家の子ども三人と、30番のギリシャ人グレゴリー・ヒ


昭和26年5月20日　（日曜日）　一版　（2）

忘れられぬあの握り飯

海越えた愛情の交換

かつての抑留者 米婦人から感謝文

図4　『神奈川新聞』昭和26年（1951）5月20日付け

トポウラス（三歳）なので、この子たちと、おそらくウォーカー家の母と祖母、グレゴリー・ヒトポウラスの母は玉川館にいたのでしょう。新聞記事というのは、『神奈川新聞』昭和二十六年（一九五一）五月二十日付けの記事です（図4）。その中にはこのように書かれています。「佐藤さんは外国婦女子が抑留中近所の人々の敵視する目を忍んで、あらゆる迫害をしりぞけ、毎日のようにわが家にアリスキルロイド夫人と英国人のベラ夫人とを招いて牛乳や時には握り飯を贈り、また寒さに泣く両夫人に、暗夜そっと木炭を抑留所（休業中の温泉宿）に持参するなど、敵国人の観念を捨てて黙々とつづけていた。」また佐藤忠治さん自身の言葉として、「あの人たちは全くみじめな生活で、大豆ばかり食べたらしく腹をこわしているので、人間としていくら敵国人でも見るに見かねてやりつづけました（後略）」と書かれています。果たして抑留所の実態はどうだったのでしょうか。

5　ずさんな管理と最初の死亡者

ここまでの聞き取りや新聞記事から、七沢の抑留所では抑留者の管理や食事の提供などが十分では無かったことが分かります。開戦前に内務省警保局が発した通牒によれば、抑留の目的は「スパイ防止と外国人の身柄の保護」でした。従って抑留所は常駐の警察官を置いて常に外国人を監視しなければならず、外国人の外部との接触には厳しい制限が付けられていました。ところが、ここ七沢では常駐の警察官がおらず、時々村の駐在が見に来るだけだったようです。身柄の保護という観点からは、健康を保てるだけの食事を与え、病気に罹れば適切な医療を受けられるようにするのが本来の抑留所の姿です。しかし七沢の抑留所が設立された一九四三年（昭和十八）末には、戦局の悪化から食料や衣類、医療品が不足していたのが実情でした。しかしそれでも敵国人抑留所には外国人向きの配給があったはずです。ところが、前出の新聞記事によれば、農家の佐藤忠治さんは、飢えに苦しむ外国人を招いて、牛乳や握り飯を贈り、寒さに泣く外国人に夜間密かに炭を届けていたというのです。美談ではありますが、七沢では食料の支給が不十分で、暖房も無く、外部との接触が事実上行われており、管理はかなりルーズだったことになります。名称も、七沢抑留所とは名付けず、玉川館の営業統計簿には「敵国婦女子ノ収容所」と書かれ、秋田県に移転してからは「舘合（たてあい）村集団生活所」とか、「外国人集団移転所」と呼ばれました。

しかし七沢の旅館に集住させられた外国人たちは、敵国人として警察の監視下に置くために集められたことは事実です。それにもかかわらず、監視や食事の提供を旅館に丸投げして、監視に必要な人員を配置せず、必要な食料の確保を怠るという、ずさんな対応をしたことは、許されるものではありません。

というのも、この抑留所では一人の抑留者が自殺しているからです。一九四四年（昭和十九）六月二十六日〈注4〉、エレノア・ラフィンは歯医者に行くと言って許可をもらい、一人で抑留所を出たまま帰りませんでした。通常ではない車線を選び駅から飛び込み自殺をしたのです。この事件について記された資料は非常に少なく、中西道子著の「エリスマン邸に住んでいた人々」〈注5〉が唯一の文献です。警察の落ち度になるため、抑留者の自殺は隠蔽されたのではないかと思います。福元館や玉川館で尋ねても、そのような事件は知らないと言われました。しかし、共に抑留されていた米国人アンナ・マイヤースは、「自殺」があったことを戦後アメリカで陸軍省戦争犯罪事務所による聞き取りで証言しています〈注6〉。またラフィン家の財産管理をしていた三菱信託銀行の担当者が、エレノア自殺の後始末を同銀行がしたという証言を残しており〈注7〉、間違いないことです。

それだけではなく、七沢ではこの後一九四五年二月を中心に、計四人もの抑留者が亡くなりました。いったい何が起こったのでしょうか。また一九四五年五月三十日、七沢の抑留所は閉鎖され、外国人たちは秋田県に向かって移送されます。彼らの秋田県の抑留所での生活はどうだったのでしょうか。

これらについては、『厚木市史たより35号』掲載予定の「後編」を、どうぞご期待下さい。

〈注〉

1 敵国人抑留についての全体像は、拙著『敵国人抑留』吉川弘文館、二〇〇九年を参照されたい。

2 『外事月報』は戦前に内務省警保局により毎月発行された極秘資料だが、不二出版により一九九四年復刻出版された。

3 国立国会図書館憲政資料室所蔵資料。

4 山手外国人墓地6区のエレノアの墓碑により確認。

5 中西道子「エリスマン邸に住んでいた人々」『わたしの横浜』横浜学連絡会議、二〇〇一年。

6 アメリカ合衆国公文書館資料。ロッド・ミラーによるコレクション、二〇〇六。

7 志立託爾（当時、三菱信託銀行最高顧問）への聞き取り。（二〇〇五年三月十一日、三菱信託銀行本社ビルにて）

厚木市史たより　第34号
令和八年（二〇二六）十月一日発行
編　集　厚木市文化魅力創造課
発　行　厚木市
住　所　神奈川県厚木市中町三―一七―一七
電　話　〇四六―二二五―二〇六〇
ＦＡＸ　〇四六―二二三―〇〇四四
『厚木市史たより』は厚木市ホームページにも掲載しています。